

東京都足立区で、地域の高齢者を支えている医療法人財団健和会柳原病院。看護の質の向上と専門職のモチベーションアップを目的に、介護福祉士を中心とするケアワーカーと看護師の連携を皮切りに、リハビリスタッフ、MSWなど、多職種連携を取り入れている。



毎日の嚥下訓練に看護師も必ず参加している

段階を分けて進める多職種協働 スモールスケールから徐々に拡大

ケアワーカーとの協力体制 一時的から継続へ転換

在宅医療のバックベッドとしての役割やレスパイト入院の受け入れなど地域の高齢者医療を支えている柳原病院。同院では、介護福祉士を中心とするケアワーカーと看護師の間でケアに対する考え方が異なっており、お互いが専門職の立場で仕事をしていく。吹田絹恵看護部長は「事例検討の一環でケアワーカーと個人的に連携をとるケースはありましたが、組織的に連携をとるには至っていませんでした。また、個人の連携も事例発表を終えると途絶えてしまっていた。」



吹田絹恵看護部長

「誤嚥性肺炎による再入院患者が多く、ケアワーカーと看護師が協働して解決できないかと考えていました」と話す吹田看護部長は、看護師とケアワーカーの円滑な連携に向けて、2019年11月に、地域包括病棟棟長に嚥下体操の実施と申し送りの共有を呼びかけた。

毎日の嚥下訓練に参加 段階的に導入を進める

「誤嚥性肺炎による再入院患者が多く、ケアワーカーと看護師が協働して解決できないかと考えていました」と話す吹田看護部長は、看護師とケアワーカーの円滑な連携に向けて、2019年11月に、地域包括病棟棟長に嚥下体操の実施と申し送りの共有を呼びかけた。病棟内でケアワーカーと看護師が協議し、嚥下訓練の研修等を経て20年2月より患者へ嚥下訓練の提供を開始した。

嚥下訓練は、パタカラ体操と呼ばれるオノマトペをケアワーカーの後に続いて復唱する訓練と、担当するケアワーカーの個々の裁量に任じた時間を設け、歌やクイズなどの得意分野を発揮するレクリエーションを10分ほどで実施する。看護部は、参加者のなかで唾液分泌を促すマッサージなどを行い訓練をサポートしている(左写真)。

心理的距離を縮めてから 組織的な協力体制を構築

こうした毎日の協働により、ケアワーカーと看護師の心理的距離が縮まり、組織としての体制づくりへとつながった。

その後も、看護部長ら役職者とケアワーカーは会議を継続し、お互いの思いを共有した。具体的には、看護師側からは「朝の打ち合わせにケアワーカーも参加してほしい。ただ現状では、ケアワーカーは朝食の介助やおむつ交換などのモーニングケアが多忙なため、参加が難しいとも思う」との意見が上がった。ケアワーカー側は「食事介助や後片づけ、モーニングケアの実施は自分たちが責任をもって取り組むべきこと」との認識を示していた。そこで、打ち合わせの開始時間を調整し、ケアワーカーが会議に参加しやすい環境に変えたのだ。



唾液分泌を促すマッサージをする吹田看護部長

吹田看護部長は「情報共有の障害となっていたことを明確にした

ことで、『できない』『仕方ない』といった考えから、『どうすれば実現できるか』という思考にシフトできた」と、会議の有効性を説明する。結果、患者情報や患者の声の共有が進み、オムツパッド変更やアメニティにヘアブラシを導入するなど、患者のQOL向上につながった。

「これらの取り組みで、看護師とケアワーカーに協働する時間が生まれ、コミュニケーションが円滑になり意識が変化していきました。大正生まれの患者さん同士の交流会を日曜日のメンバーが独自で開催したり、介助入浴日ではない日に協力して介助入浴を実施するなど、ボトムアップ型組織に成長するきっかけにもなっています(吹田看護部長)」

同院では、こうした看護師と多職種の連携を進めており、病棟カンファレンスの開催方法をMSW、リハビリ課、退院支援看護師、病棟棟長で協議して、臨床倫理の4分割法の視点を取り入れ、22年2月からは、リハビリ課との協働で

集団リハビリテーションを地域包括ケア病棟で開始している。

吹田看護部長は「取り組みのきっかけになった再入院率の改善効果は薄かったものの、看護師がキーパーソンとなり、多職種連携による情報共有や協働が集中してできるようにになりました。また、22年度診療報酬改定では看護補助体制充実加算も新設されました」と、多職種との協働の有用性を話す。

医療法人財団健和会 柳原病院

住所 東京都足立区千住曙町35-1
TEL 03-3882-1928
病床数 90床(急性期一般病床2、45床、地域包括ケア病床45床)
診療科 11診療科
職員数 150人

